音　　楽

音楽科は、表現及び鑑賞の（幅広い）活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽（、音楽文化）と豊かに関わる資質・能力を育成することを目標にしている。

この目標を実現するために、児童生徒が思いや意図をもって表現したり、味わって聴いたりするなど、一人一人が感性を豊かに働かせながら主体的に活動に取り組む態度を大切にし、楽しい音楽活動を展開することが重要である。　※（　　）内は中学校

【小　学　校】

1　音楽科の指導の重点

(1)　音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動を組み立てよう

「音楽的な見方・考え方」とは、音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で考え、自己のイメージや感情、生活や文化等と関連付けることである。音楽的な見方・考え方を働かせた音楽科の学習を積み重ねることによって、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力は育成され、その後の人生において生きて働くものとなる。

(2)　音楽に対する感性を育てよう

音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培うためには、音楽に対する感性が重要である。音楽に対する感性とは、音楽の様々な特性に対する感受性（音楽を感覚的に受容して得られるリズム感、旋律感、和音感、強弱感、速度感、音色感等）や、音や音楽の美しさ等を感じ取るときの心の働きを意味している。児童が音楽的感受性を身に付けるとともに、音や音楽の美しさ等を感じ取ることができるようにするためには、表現及び鑑賞の学習において共通に必要となる資質・能力を示した〔共通事項〕を指導計画の中に示し、重点的に扱う「音楽を形づくっている要素」を明確にしたり、表現及び鑑賞の各領域分野と〔共通事項〕との関連を十分に図った学習活動を展開したりすることが大切である。

(3)　思いや意図を表現するために必要な知識・技能の習得を目指そう

児童が、「楽しくスキップしているように音を弾ませたい」「急いでいる感じが伝わるように、だんだん速く演奏したい」などの思いや意図をもったとき、それを表現するために必要な知識・技能を習得できるように指導方法を工夫する。その際、音楽科の学習が、音楽活動を伴わない知識のみの習得や、技能向上に特化した訓練といった活動にならないよう配慮する。児童一人一人が感性を働かせながら、主体的に活動に取り組み、楽しく音楽活動を展開していくことができるよう、配慮することが大切である。

(4)　音楽文化について理解を深める態度を培おう

国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中、我が国や郷土の音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに諸外国の音楽文化を尊重する態度等を養う観点から、我が国や郷土の音楽の指導を一層充実させる。国歌「君が代」については、いずれの学年においても歌えるよう指導する。

2　主体的・対話的で深い学びを引き出す音楽科の学習指導

(1)　思考、判断し、表現する一連の過程を大切にした年間指導計画を作成しよう

ア　指導内容を明確化・焦点化し、基礎的な能力を確実に身に付けるとともに、学期や学年間における題材の連続性や発展性を見通して指導計画を作成する。

イ　学習したことや経験したこと（他教科、道徳教育、幼稚園教育等含む）を関連付けて題材を設定し児童が情景や気持ちをより豊かに感じ取ったり表現したりすることができるようにする。

(2)　主体的・対話的で深い学びを引き出す学習内容を工夫しよう

ア　速度・強弱等の音楽を形づくっている要素に着目し、曲をどのように音楽で表すかについて見通しをもったり、音楽表現のよさや面白さ、美しさが、音楽を形づくっているどの要素の働きによって生み出されたのかを明確にしたりすることができる場面を設定し、主体的な学びを促す。

イ　気付いたことや感じ取ったことを言葉や音楽で伝え合い、音楽の構造について共有したり、感じ取ったことに共感したりして、自分の考えを広げたり深めたりするなどの対話的な学びを促す。

ウ　児童が自ら音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、捉えたことと自己のイメージや感情、生活や文化等と関連付けて考えることができるよう指導を工夫し、深い学びを促す。

(3)〔共通事項〕は、歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞の各内容と関連させて適切に指導しよう

ア　音楽を形づくっている要素（音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、和音の響き、音階、調、拍、フレーズ、反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横との関係等）と、児童が感じ取った楽曲のよさや面白さ、美しさ等を、教員がつなげる支援をすることで、音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、関わりについて考えることができるようにする。

イ　音符、休符、記号や音楽に関わる用語について、音楽における働きと関わらせながら、実際に活用できる知識として理解できるようにする。

(4)　ＩＣＴを活用しよう

ア　１人１台端末を活用し、興味のあるところを繰り返し聴いたり、端末上でリズムを並べ替えて確かめながら音楽づくりをしたりと、主体的に活動できる取組を行う。

イ　児童自身の演奏を録音や録画で残すなど学習履歴を蓄積することで、学習の振り返りや成果の確認に生かすことができるようにする。

ウ　創作活動において、つくった音楽を記録したり、再生したりできるようにする。

(5)　評価を次の学習活動につなげよう

ア　児童の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を明確にし、その題材の学習内容を踏まえて音楽を形づくっている要素を適切に選択し、題材の評価規準の「思考・判断・表現」に位置付けて評価する。

イ　思考・判断したことと思いや意図をもって表現する過程を大切にし、多様な評価方法（演奏や作品、ワークシートへの記述、活動中の発言等）を組み合わせて評価する。

ウ　単元や題材等の内容や時間のまとまりごとに、目標の実現状況を把握できる場面を精選して評価する。

個別最適な学びを実現するための授業例（小１「えからうまれるおんがく」音楽づくり）

「ぱんぱん」「ちゃぽん」「ぼーん」等の言葉と絵を見て、それにふさわしい音を楽器や身の回りにあるものを使って探す活動では、①生活科の「学校探検」や「季節を探そう」等の単元で見付けた事物と関連付けることで、子供の主体性と想像力を高めました。また、探した音を他の子供と紹介し合うことで、お互いのよさを認めたり、新たな気付きを得たりすることができました。音を探す活動では、子供がこだわりをもって夢中で取り組む姿が見られました。

活動を音楽科としての学びへと昇華させるために、②「どんな鳴らし方をしたら絵にふさわしい音色になるかな」と問いかけました。この発問をきっかけに、子供は「音色」を意識するようになり、楽器や身の回りにあるものを扱う手付きが変わり、音色にこだわる姿が見られました。

ここがポイント！

①楽器、生活科で見付けたものの実物や写真等を準備することで、子供が自分の体験や発見をもとに、絵と音とのつながりに思いや意図をもつことができます。

②思考判断のよりどころとなる音楽を形づくる要素を「音色」とし、声かけすることで、子供は「何を比べるか」「何を考えるか」が分かりやすくなります。

【中　学　校】

1　音楽科の指導の重点

(1)　音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動を組み立てよう

「音楽的な見方・考え方」とは、音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化等と関連付けることである。「音楽的な見方・考え方」を働かせた音楽科の学習を積み重ねることによって、生活や社会の中の音や音楽文化と豊かに関わる資質・能力は育成され、その後の人生において生きて働くものとなる。

(2)　音楽に対する感性を豊かにしよう

音楽に対する感性とは、音や音楽のよさや美しさ等を価値あるものとして感じ取る心の働きを意味している。また、感じ取って自己を形成していくこと、新しい意味や価値を創造していくこと等も含まれる。美しい音楽に触れる機会や互いの表現のよさを認め合う場、さらに、そのよさを自分の活動に生かし自己表現力の幅を広げようとする場等を、授業や学校生活の中に意図的かつ計画的に設定していくことが必要である。

(3)　思いや意図を表現するために必要な知識・技能の習得を目指そう

音楽活動に必要な知識・技能とは、単に新たな事柄を知ったり、一定の手順や段階を追って身に付けたりするものではない。知識に関しては、〔共通事項〕の音楽を形づくっている要素（音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成等）の働き等について実感を伴いながら理解し、表現や鑑賞等に生かすことができるようにすること、音楽の歴史や文化的意義を自己との関わりの中で理解することが重要である。また、技能に関しては、創意工夫の過程で様々な音楽表現を試しながら思いや意図を明確にする中で得られるものであり、変化する状況や課題等に応じて主体的に活用できる技能として身に付けるべきものである。

(4)　音楽文化について理解を深める態度を培おう

我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を深め、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに、諸外国の音楽文化を尊重する態度を養うため、我が国や郷土の伝統音楽の指導を一層充実させる。楽曲や曲種についての知識の量を増やすだけではなく、表現や鑑賞の活動を通して、音楽が人々の暮らし、地域の風土、文化や歴史等の影響を受け、社会の変化や文化の発展とともに生まれ、育まれてきたものであることを感じ取ることができるような指導の工夫が必要である。

2　主体的・対話的で深い学びを引き出す音楽科の学習指導

(1)　思考、判断し、表現する一連の過程を大切にした年間指導計画を作成しよう

ア　３年間で身に付ける資質・能力を見通した指導計画を作成する。小学校からの系統性・発展性を見通した指導計画を作成する。

イ　表現と鑑賞の相互関連を図った題材や、歌唱、器楽、創作の相互関連を図った題材の指導計画を作成する。表現（歌唱、器楽、創作）及び鑑賞のバランスを考慮し、幅広い活動を位置付ける。

ウ　我が国の伝統的な歌唱や、和楽器による表現を年間指導計画に位置付け、我が国の音楽に親しみ、一層愛着をもつことができるようにする。

(2)　主体的・対話的で深い学びを引き出す学習内容を工夫しよう

ア　音や音楽によって喚起されるイメージや感情を自覚し、その要因となった音楽の構造や曲の背景との関わりを考え、表したい音楽表現や音楽のよさや美しさを見いだすことに関する見通しをもったり、学んだことの意味や価値を自覚したりできるようにして、主体的な学びを促す。

イ　気付いたことや感じ取ったことを言葉や音楽で伝え合い、音楽の構造について共有したり、感じ取ったことに共感したりして、自分の考えを広げたり深めたりするなどの対話的な学びを促す。

ウ　生徒が自ら音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、捉えたことと自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化等と関連付けて考えることができるような場面設定や発問等を工夫し、深い学びを促す。

(3)　〔共通事項〕は、歌唱・器楽・創作・鑑賞の各内容と関連させて適切に指導しよう

ア　音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成等の音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受できるようにする。特に、表現と鑑賞の学習の支えとなる指導内容を〔共通事項〕として指導計画の中に示し、重点的に扱う「音楽を形づくっている要素」を明確にする。

イ　音楽を形づくっている要素とそれらの働きを表す用語や記号等について、音楽における働きと関わらせて理解することができるようにする。

(4)　ＩＣＴを活用しよう

ア　鑑賞の学習において、１人１台端末を活用することで、聴覚だけでなく、視覚等の他の感覚を働かせて音や音楽を捉えながら、音楽表現を創意工夫したり、音楽を聴き深めたりすることができるようにする。

イ　創作の学習において、つくった音楽を記録したり、再生したりする機能を活用し、創作活動を創意工夫する活動に集中することができるようにする。

ウ　自分たちの演奏や作品を録音や録画で残すなど学習履歴を蓄積することで、学習の振り返りや成果の確認に生かすことができるようにする。

(5)　評価を次の学習活動につなげよう

ア　生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を明確にし、その題材の学習内容を踏まえて音楽を形づくっている要素を適切に選択し、題材の評価規準の「思考・判断・表現」に位置付けて評価する。

イ　思考・判断したこと及び思いや意図をもって表現する過程を大切にし、多様な評価方法（演奏や作品、ワークシートへの記述、活動中の発言等）を組み合わせて評価する。

ウ　単元や題材等の内容や時間のまとまりごとに、目標の実現状況を把握できる場面を精選して評価する。

個別最適な学びを実現するための授業例（中３「春」アルトリコーダーアンサンブル）

子供が自分の技能に合わせて演奏するパートを選択することができるよう、①技能レベルが異なる４つのパートで構成された「春」の楽譜を準備しました。

４人グループで練習し、演奏の動画を１人１台端末で録画して改善を図りました。②グループで演奏を評価するポイントを３つ（例：速さの統一、聴き合うこと、強弱の変化）考え、それをレーダーチャートの評価軸に設定して、グループ内評価を重ねました。目標をもって練習に何度も取り組むことができ、個人の技能の高まりとともにグループの演奏が向上し、質の高いアンサンブルへと変化しました。練習を続ける中で、録画を見て振り返る段階から、演奏しながら自分やグループの演奏を評価するようになり、演奏→視聴→改善のサイクルが、演奏→改善→演奏→改善のサイクルへと変容し、深い学びへとつながりました。

ここがポイント！

①子供自身が技能レベルに合うパートを選ぶことで、苦手意識のある子供が取り組みやすくなります。

②評価のポイントを自ら設定し、演奏と評価を繰り返すことで、技能の向上やアンサンブルの質の高まりを得ることができます。